大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十二卷　第六號

昭和十一年六月一日發行

論叢

資産者と課税……法學博士　神戸正雄

フィシヤア利子論の分析……文學博士　高田保馬

現代の「生の哲學」としての經濟哲學……經濟學博士　石川興二

時論

大都市における商店街の構成……經濟學博士　谷口吉彦

研究

私設工場委員會と企業……經濟學士　大塚一朗

節約投資の均衡と中立貨幣……經濟學士　中谷實

再保險料率に關する一研究……經濟學士　佐波宣平

パレトの生産均衡論……經濟學士　青山秀夫

說苑

シュタインの政治經濟學批判について……經濟學士　島恭彦

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第四十二卷總目錄

（禁轉載）

第四十二卷　一〇〇〇　第六號　三八

現代の「生の哲學」としての經濟哲學

——その概念と課題と立場——

石川興二

一、經濟哲學の「學の哲學」より「生の哲學」への轉換

哲學の本質なるものは、嘗て述べしが如くこれを一言にして言へば、思惟の徹底であり「最も徹底せる最も力强き最も抱括的な思惟」das folgerichtigste, stärkste, umfassendste Denken に外ならない。換言せば思惟の本質を徹底することである。

かく哲學すると云ふことはかゝる意味に於て、所與的な何物かを哲學する etwas philosophieren ことである。而してこの所與的なものは、これまで支配的であつたところの「學の哲學」Wissenschaftsphilosophie にとつては「學」であつた。卽ちこの「學の哲學」は、所與的な學の成立の根據を明にしこの根據よりこの學を根據づけ聯關づけ Grundlegung, Begründung und Zusammenfassung 以てこれを確立せんとしたのであつた。カントがニュートンによつて立てられた物理學を、また新カント派が自然科學に對して十九世紀以來發展し來れる歷史學を基礎づけんとせしはこの代表的な例であつた。我國に於て『經濟哲學』なる名稱がはじめて人々の注意を引いたのは、この新カ

1) 拙稿『デイルタイ哲學と經濟哲學』本誌第三十二卷第四號

ント派の立場に立つて經濟學を基礎づけんとせし左右田哲學であつた。從つてこの左右田哲學の立場が久しく我國の經濟哲學を規定したのであつて、今日尙ほ經濟哲學をかゝる立場に於て考へる人が少なくないのである。

かく「學の哲學」にとつてはそれが哲學するところの所與的なものは「學」であつたが、「生の哲學」にとつては「生」そのものである。而して「學」なるものも「生」の一內容たるに過ぎないのである。卽ち「生の哲學」Lebensphilosophie なるものは、「生」そのものを哲學せんとするのである。換言せば「生」について思惟を徹底するのである。而もこのことは人間の實踐的本質に發する。卽ち人間なるものは、歷史的社會的實在の中に在つてこの實在に規定されながら而もこの實在を規定することによつて生を形成發展せしめ行くのであるが、この實在を規定するところの實踐なるものは思惟の過程と實行の過程とより成つて居る。[1] 卽ち先づ思惟の過程に於て思惟したところのものが實行の過程に於て實行に移されるのである。この思惟は、はじめ生活經驗より成立つて居るのであるが、その實行が確實にその目的を達せんが爲めにはそれが出來るだけ確實なものに高められなければならない。かくて思惟は次第に徹底されて學的智織に高められ更に學的智織は哲學的智織にまで高められて行き、こゝに「生の哲學」なるものが成立することゝなる。故にこの「生の哲學」なるものは、生を徹底的に思惟することによつてその本質を明にし、この生の本質に基いて生に對する實踐的思惟を根據づけ聯關づけて以て確立し、これによつて生の實踐的支配を

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第一一八頁參照

確實にせんとするところのものである。かくて「學の哲學」なるものも自ら「生の哲學」の中に抱含さるゝことゝなるのである。我國に於て『經濟哲學』なる名稱が人々の注意をはじめて引いたのは前述せし如く、「學の哲學」としてゞあつたが、而もそれが重要な意義を有するに至れるは「生の哲學」としてゞあつた。即ち左右田哲學は大正年代のはじめに於て即ち我國の資本主義の全盛期に於てこの資本主義を安定保持せんとせし安定體系としての在來の經濟學[1]を基礎付けんとするところの認識論を主とする「學の哲學」であつたが、これに對し世界大戰後の恐慌時より我國資本主義制度が崩解期に進み入りし時より次第に支配的となり來れるマルクス哲學は、資本主義社會なるものに對する鋭き本質觀であるところの唯物史觀に基きこの資本主義制度の崩解期に於ける生に處すべき態度を教へんとしたるが故に、それは曩の「學の哲學」としての經濟哲學と異なり、深く人心に食ひ入つて行つたのである。即ちそれは單に經濟學を認識論的に基礎付けんとする「學の哲學」ではなく、生の本質に即して生を支配せんとするが故に「生の哲學」であり而も經濟的生を中心とするが故に「生の哲學としての經濟哲學」である。然しながらかゝる意味に於て、「生の哲學としての經濟哲學」なるものは、事實上に於てはこれ以前より既にあつたのである。即ち現代資本主義制度自體は、經濟的生に對する一定の本質觀とこれに基く處生觀との上に立つてゐるのであるが、またこの制度の安定體系としての在來の經濟學も同樣の人生觀とこれに基く處生觀並に認識論をその根據に於て事實上有して居たのである。然しながら、資本主義を安定保持せん

1) 拙稿『經濟學史の基本問題』本法本誌第一卷參照

とするこの立場に於ては、その哲學的基礎を十分なる哲學的自覺に從つて哲學的體系に高めてこれを主張することは、この資本主義制度を變革せんとするマルクス體系に於ける程必要ではなかつた。卽ちこの現存の制度を人々の自覺に訴へて變革せんとするマルクス體系の立場に於ては、この制度を全實在との聯關に於て根本的に反省し、その變革的自覺を確乎たる哲學にまで高めねばならなかつた。かくて在來の資本主義制度に慣れ從つて無自覺的にその保持安定に拘泥して居る人々に對しこの制度に對する批判的態度を呼び起すことゝなつたのである。

このマルクス哲學によつて我國の經濟哲學は「學の哲學」より「生の哲學」へ轉換したのであつて今日の經濟哲學もまた同樣に「生の哲學」でなければならないのであるが、而もマルクスに於ては未だ「生の哲學」の立場が十分に徹底されて居ない。卽ち前述せし如く、「生の哲學」なるものは生の本質を明にしこれに基いて生に對して實踐すべき思惟を確立し以て生の支配を確實にせんとするものであるが故に、それは何よりも生そのものゝ本質に立脚しなければならないのであるが、而も事實上に於ては既成の學である形而上學、自然科學等に於ける既成の概念を通じて生が眺められ從つてその本質が歪められて居る。而してマルクス哲學の生の本質觀が十九世紀に支配せし生物學の概念にて歪められてゐることは嘗て述べたところである。[1] 故に今日の「生の哲學」の中心を爲せるディルタイは「私の哲學の根本思想は今日まで未だ嘗て全體的な完全な歪められない經驗が哲學することの基礎に置かれなかつた、從つて未だ嘗て全體的な完全な事實が哲學すること

1) 前掲拙著第一四頁參照

の基礎に置かれなかつたと云ふことである」[1]と述べてゐる。かくて「生の哲學」は生そのものから出發し生そのものゝ本質に迫らなければならない。ディルタイはこのことを明に「生は哲學の出發點を形成しなければならぬ基礎事實である」と述べまた「生は生自體より理解せらるべきである」と述べて居る。

かくて現代の經濟哲學は、この「生の哲學」の立場を徹底することによつて確立されなければならないのであるが故に、先づ現代の生そのものより出發して、現代經濟哲學の課題並にこの課題解決の立場を明にせんとするのである。

二、現代經濟哲學の課題

今日世界は擧げて動亂の眞只中に立つて居るのであるが、それは要するに現代の資本主義的秩序が崩解しつゝあるが故である。卽ち中世封建制度の崩解と共に個人主義的原理に立つて國內的並に國際的に成立發展して行つた資本主義制度はその發展の極世界大戰を勃發せしめこゝにその崩解がはじまることとなつた。卽ち、先づ交戰國ロシアに於て資本主義制度の社會主義的革命が起り次でこれが獨逸に波及することによつて、この大戰は終結するに至つた。この社會主義的革命はロシアに於ては其後着々建設の步武を進めつゝあるに對し獨逸並に伊太利に於ては失敗に終りその反動としての國家主義的變革が後者に於てはファシズム運動として、前者に於てはナチス運動として進行しつゝある。かくて嘗ての戰敗國獨逸は今や歐洲國際場裏に於て强力なる地位を

1) Dilthey, Ges. Schrif. VIII. S. 175

恢復しつゝ伊太利と共に國際的關係の現狀打破に拍車を加へつゝあるのである。かく資本主義的制度に對する變革が進展しつゝある一方米國に於ては、資本主義制度の原理を保持しながら而もこれより生ずる弊害を除去せんが爲めにこの制度に對する國家の統制を大仕掛に於て强行するところのニラなるものが實行されたのであるが、而もそれは現行の資本主義的憲法に對する違反の故を以て全般的に廢止されるに至つた。このことは資本主義制度の原理を維持しながら而もその弊害を除去することの可能なるや否やを大仕掛に於て實驗せしものとして世界史的な重大意義を有するのである。

現代世界に於ける最も有力な一國民としての我國についても、同樣の事情が見られるのである。卽ち我國に於ては現代の資本主義制度は世界大戰時を以てその全盛期に到達したのであるが、大戰後の恐慌時代より資本主義制度に對する變革思想が擡頭し來つた。而してその支配的地位に先づ上つたのは社會主義的變革思想であつたが、滿洲事件の突發以來は國家主義的變革思想がこれに代つて支配的となり來つた。これ等の思想は幾多の事件を惹起したのであるが、而も未だ資本主義制度を根抵より動かすまでには至つて居ない。かく資本主義制度そのものを變革せんとする思想が行はれて居る一方、實際界に於てはむしろ資本主義制度の原理を保持しながらこれに對して國家的統制を强化せんとする統制主義が支配的である。

かくて今日全世界は現代の資本主義的經濟制度の變革を中心問題として動亂しつゝあると云ふ

ことが出來るのである。

然るに社會制度の變革期は生命の危機である。そこに於て人間的生命は沒落するかまたは新なる發展に進むかの岐路に立つのである。而してこの生命の新なる發展は十分なる自覺に基いて行動することによつてのみ達し得られるのである。中世の封建的制度より現代の資本主義的制度への變革もかくて人間的生命の重大なる危機であつた。亞細亞に於ては獨り我國民のみがよくこの危機に處し得て今日の隆盛を致せしことはこの變革期に於て十分なる自覺を有しこれに基いてその行動を誤らなかつたが故である。卽ち「我國未曾有の變革を爲さんと」[1]する明治維新の國民的自覺は「五ヶ條の御誓文」並にその「御宸翰」[2]に於て結晶されて居るがそこにはこの明治維新の變革が何故に爲されざる可らざるかまた如何なる根本方針によりて爲されねばならぬかゞ國民全般に明示せられて居るのであつて、國民はこの自覺に基いて一致協力して此變革を着々押し進めたのである。こゝに世界に誇るべき變革の業が爲し果げたられたのである。かくして打立てられ其後我國民の生命の發展に大なる貢献を爲したる現代の市民社會制度が、今やまた國民の生命の發展と矛盾するに至つてこゝに我國民は再び變革期に到達したのであるが、この今日の新な變革期に處するに當つてもこれを完ふせんとするならば、何故に變革がなされざる可らざるかまた變革が爲されざる可らずとするならば如何に變革されざる可らざるかと云ふことに就て國民的自覺が明確に打立てられて居なければならないのである。ことに今日の國民經濟社會は封建時代のそれに比

1) 「五ヶ條の御誓文」參照
2) 友朋堂文庫『勅語集』には「維新の詔」と名づけられて居る。同書第四〇五頁參照

し、內に複雜な發展を果げ諸文化域との複雜なる聯關にあるのみならず外に國際的聯關の中に密接に織り込まれてゐるが故に、現代經濟制度の變革の自覺は、ひとり經濟の域に限定されるものでなく、生の全般に關聯する全般的な自覺でなければならない。更に今日の國民は封建社會のそれと異なり市民社會を通過することにより各人が遙に自覺的となり來れるが故にこの變革的自覺は明治維新に於けるものよりも一層根本的なものでなくてはならない。かくて現代の變革の自覺は根本的全般的な自覺として、それは「最も徹底せる最も力强き最も抱括な思惟」であるところの哲學的自覺にまで高められなければならないのである。かゝる哲學的自覺を確立することが卽ち現代の「生の哲學」の課題であつて、而もそれが經濟的制度を中心とするものなるが故に、「現代の生の哲學としての經濟哲學」の課題なのである。かゝる課題が經濟科學のみによつては解決し得ないことは、實在の一部を對象としその本質を全般的根本的に反省することなき科學の當然なる限界であつて、今日の經濟科學はかゝる經濟哲學によつてはじめて確立されるのである。[1]

然らば今日かくの如き課題に答へるに足る哲學的思惟が確立されて居るであろうか。

既に述べしが如く、我國に於て資本主義制度の變革問題が盛となつて來たのは世界大戰後の恐慌期からであつた。而して最初支配的となれるものは社會主義的立場であつた。我國に於ける社會主義的思想運動は既に明治三十年代に於て高まつて來たのであるが明治四十三年に發覺した大逆事件によつて阻止せられ、其後はドイツ的な社會政策的主張が社會政策學會として高まつて來

1) 科學なるものが哲學と異なつて、實在の一部分を對象とし且つその本質を根本的全般的に反省するものではないことについても、前揭拙稿『デイルタイ哲學と經濟哲學』參照。

た。然るに世界大戰後資本主義制度が動搖しはじめ社會主義が勃興し來ると共にこの學會は立ち消えの形となつた。而して世界大戰後に高まり來れる社會主義に於てもサンディカリズム・アナアキズム等諸種の形が現れたのであるが、ロシアに於てマルクス主義革命が進展し行くと共にこれが我國の社會主義的運動に對する强き力となつてその發展方向を規定し遂にこの立場が支配的となつた。このマルクス主義は、また哲學的基礎の上に打立てられたる一大思想體系として强き迫力を以て青年の心を把へたのであつて、こゝに幾多の思想問題とこれに伴ふ悲劇とが惹起されたのである。世界大戰後これ等社會主義的思想運動が高まり來ると共にこれに對立するものとして所謂右翼的團體の諸種なるものが續々設立されて行つた。而してこれ等の諸種の右翼團體は各々其主義綱領を掲げて居るのであるが、而もその多くは極めて漠然たる主張たるに止まり、左翼思想に見られるが如き、哲學的根據とこの根據の上に打立てられたる學的體系を缺くが故に、各自の思想の中にあつて矛盾が見られるのみならずまた一樣に右翼思想と云はるゝものゝ相互の間に於ても諸種の立場が雜然として混交し從つてまた互に對立抗爭して居る。その中比較的體系的であるところのものについて見るも、例へば、北一輝の立場は、[1] 或は國家主義であると云はれ或は反對に社會主義であると云はれるのであるが、而も根本に於ては個人主義的經濟の原理をそのまゝ是認して土地產財は十萬圓まで動產は百萬圓まで營業資本は千萬圓までと云ふが如くたゞこれに國家主義的制限を附したるものに過ぎないのである。また權藤成卿の立場は[2] 資本主義にも社

1) 北一輝著「日本改造法案」
2) 權藤成卿著「自治民範」「農村自治論」

會主義にも國家主義にも反對し古代の農村自治に歸へらんとする復古主義の立場である。これと相似て農業を重んずる橘幸三郎の立場はこれよりも進歩的である。かく觀し來るならば、今日一概に右翼思想と云はれるところのものゝみについても、先づこれを原理的に區別しその各々の根據を明にし、この根據よりその各々の主張を明確にし、然る後この各々をその根據にまで遡つて吟味し批判しなければならないのである。[1]

かくて今日の我國に於てはこの重大なる、現代資本主義制度の變革期に處する爲めの國民的自覺たるべき思想體系は未だ確立せず、諸種の思想が無秩序に敵對的に抗爭しながら現れて居るのである。この思想の無政府狀態に於てまた「哲學的精神」なるものが特に必要となるのである。

卽ち「哲學的精神 der philosophische Geist は、諸の生活價値や理想が新な吟味にかけられるその至るところにある。或時代の內部に於て又は或人の心の中に於て無秩序に又は敵對的に抗爭しながら現れ來るところのものは何でも思惟によつて宥和さるべきである。不明瞭なものは何でも闡明さるべきである。媒介されずに並立して居るものは何でも媒介され聯關に置かるべきである。」[2]

今日はかゝる意味に於ける哲學的精神が最も必要な時代である。この哲學的精神を以て今日相對立抗爭して居る諸種の思想をそれが立脚せる最後の根據にまで溯つてこれを闡明し且つ吟味し更にこれを媒介することによつて眞に具體的な根據を明にしこの具體的なる根據より相對立するところのものを基礎付け聯關づけることが必要である。かくてこゝにはじめて今日の資本主義的經

1) 橘幸三郎著「農村學」
2) Dilthey, Das Wesen der Philosophie Ges. Schrif. V. S. 413

濟制度の變革につき眞に國民を承服するに足る具體的な思想體系が確立し得られるのである。

かくて要するに今日の「生の哲學としての經濟哲學」の課題は、現代の生卽ち資本主義制度の下に在る生の本質を明にし、これに基いてこの資本主義制度に對する實踐的思惟を吟味し確立し、以て現代の生の支配を確實にすることである。

三、市民社會變革哲學と其立場の史的發展的聯關

以上に於て明にせし如く現代經濟哲學の課題は、現代資本主義社會又は市民社會變革の哲學的基礎を確立することである。而もこゝに注意すべきは、市民社會變革の哲學が今日まで脈絡たる史的發展を果げ來つたことである。かくて我々が今日この課題を眞に具體的に解決せんとせば先づこの市民社會變革哲學の史的發展的聯關を考察し置くことを要するのであるが、こゝには主としてこれ等哲學に於ける此課題解決の立場について考察することゝする。

市民社會變革の哲學は、先づ古代ギリシヤに於ける市民社會の沒落期に於て、成立つた。卽ちペロポネソス戰後のギリシヤは、市民社會の沒落期として今日の世相と甚だ相似たるものがあつたのであるが[1]、こゝにソフィストの個人主義に對するプラトーの國家主義の對立が先づ見られた。卽ちソフィストは個人を本質的なものとなし國家を以てこれが手段となし本來獨立自存する個々人が生活の便宜の爲めに相寄つて國家なるものを形成したものであると考へ個人主義の基礎を置いた。このソフィストに對立して立つたプラトーは、個人主義的に分解されつゝあつた當時の社

1) 坂口昂氏著、『世界に於ける希臘文明の潮流』第35—6頁參照、前掲拙著第四六頁參照

會に對する憤激の結晶として成つたと云はるゝ『レパブリック』に於てこの個人主義的社會と正に反對する國家主義的理想社會を說いて國家を以て本質的なものとなし個々人を以てこれが手段となし國家は「大きな形に於ける人間」であり個々人はこの國家に隷屬する細胞の如きものとして考へ國家主義の基礎を置いた。而もこの相對立する個人主義と國家主義との對立を止揚してはじめて國民主義の立場を確立したものはアリストテレスであつた。[1] 卽ち彼はその『政治學』のはじめに於て「國家は自然の創造物であり人間は本性上政治的動物であると云ふことは明である。而して單なる偶然によつてではなく本質上に於て國家なくしてある人は惡人であるか又は人類以上のものである」「社會的本能は總て自然によつて植付けられて居る而も初めて國家を發明した人は人類の最大の恩人であつた。何となれば人間は完成されたる時には最善の動物であるが然し法並に正義より離れた時は最惡の動物である」[2] と述べ、以て人間は國民生活に於てのみ人間たることが可能であり國家の目的はその成員たる總ての人を人間たらしむることを明にし以て國民主義の基礎を置いたのである。而して『政治學』の終りに於てはかくの如き理想的なる國民社會の實現について考察して居るのである。[3]

市民社會の變革哲學はかくギリシヤ市民社會の沒落期に於てはじめて成立したのであるが、而もこゝに特に注意すべきことは、このギリシヤ哲學殊にアリストテレス哲學が今日の市民社會の變革哲學に繼承發展せしめられて居ることである。卽ち先づヘーゲルはアリストテレスを祖述す

1) 前掲拙著第四九頁以下參照
2) Arittotle, Politica. 1252b—1253a
3) 拙著第二〇八頁以下參照

ることによつて現代市民社會變革哲學の偉大な基礎を置いた。即ち彼は『エンチクロペディイ』の精神哲學の初めに於てその精神哲學の本質的目的を以てアリストテレスを祖述することにありとなし曰く「心に關するアリストテレスの諸著作はこの對象に關して書かれたところの思辯的興味ある最も勝れたまた唯一の著作で今尙ほある。精神哲學の本質的目的 Der wesentliche Zweck einer Philosophie des Geistes は、只だ精神の組織に再び概念 Begriff を導入し、斯くすることによつてアリストテレスの諸著の意味を再び明にすることであると云ふことが出來る」[1]と述べて居る。ヘーゲルはこの『エンチクロペディイ』の精神哲學に於て、殊に精神哲學の客觀精神の部分を詳論せし『法の哲學』に於て、現代の市民社會の本質をはじめて明にすると共にそれを王侯の權力の絕對的に支配せる「國家」へ止揚さるべきものとして現代市民社會の國家主義的止揚の立場を明にした。然るにマルクスは此へーゲルの立場「逆立ち」せしめこの市民社會を重んじその個人主義的原理を徹底せしむることにより現代の市民社會を變革する立場を置いた。即ち彼は『經濟學批判』の「序言」に於て曰く「私を惱ました問題の解決の爲めに企てた最初の勞作は、ヘーゲル法律哲學の批判的修正 eine kritische Revision der Hegelischen Rechtsphilosophie であつた。その序論は一八四四年パリで公にされた『獨佛年誌』に現れた。私の研究は、法律問題並に國家形態なるものは、それ自身によつて理解さるべきものではなく、むしろそれは、物質的生產關係 die materiellen Lebensverhältnissen ——それが總和は、ヘーゲルが、十八世紀に於ける英佛人の先蹤に倣うて、

1) Hegel, Encyclopädie. § 278

"bürgerliche Gesellschaft"「市民社會」なる名稱のもとに包括せしところの――にその根據を有するものだと云ふこと、しかもこの市民社會の解剖學的研究は、これを政治經濟學のうちに求むべきものだと云ふこと、の結論に達した。[1]」と述べ。また「私は公然かの偉大なる思想家[2]の門人たることを承認した。」と述べて居る。卽ちマルクスの市民社會變革の哲學的立場はかくてヘーゲルとの密接なる關係に於てその發展として成立したのである。而して今日市民社會の社會主義的變革の立場がマルクスに於てその哲學的基礎を有するが如く、その國家主義的變革の立場は、その最も深き哲學的基礎をヘーゲルにまで溯つて求めねばならないのである。かくて市民社會變革の哲學はギリシャ以來今日に至るまで連綿たる聯關を以て發展し來つたのである。而して個人主義的立場を徹底せし社會主義の立場と國家主義の立場とが對立抗爭している今日の段階は正にアリストテレスに對すると同樣な哲學的發展段階に於てあるのであつて、この相對立する今日の社會主義的立場と國家主義的立場とを止揚綜合して以て國民主義的立場に立つて今日の市民社會變革の哲學を確立することが今日の經濟哲學の任務である。これを哲學史的聯關に於て云ふならば、市民社會變革の最初の國民主義的立場としてのアリストテレス哲學を、その分化發展としてのヘーゲルの國家主義的立場とマルクスの社會主義的立場との對立を通じて具體的に回復することである。換言せば國民主義の an sich の段階としてのアリストテレスをその für sich の段階としてのヘーゲルとマルクスとの對立を通じて發展せしめその an und für sich の段階に於ける今日の國

1) Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort.
2) ヘーゲルを指して云ふ

民主義哲學を確立することである。

以上は一般的に哲學史について考察したのであるが、次にこのことを現代の事實について考察して見よう。

四、現代經濟哲學の立場

經濟制度の變革を中心とする我國の現代の思想に於ては、前述せしが如く、先づ左翼思想と右翼思想とが對立抗爭してゐるのであるが、所謂右翼思想のみについても見る諸種の立場が混交し對立抗爭して居るのである。今この右翼思想の中に混合しているところの資本主義的要素、農村自治主義の如き明な復古主義的要素等を除去し、右翼思想を右翼思想として、左翼の社會主義に對立せしむるところのものを求むれば、それは國家主義たる點に於て存するのである。かくて現代の我國に於て資本主義の變革を問題とする立場を原理的に區別するならば、先づ資本主義制度の原理を保持せんとする保守的立場とこれを變革せんとする變革的立場とが區別される、更に變革的立場には復古的なるものと前進的なるものとが區別される。この前進的な立場については社會主義的立場と國家主義的立場とが區別される。而して今日支配的なものはこの最後の兩者の立場である。

この兩者の立場が我國に於ても對立抗爭して居ると云ふことは意味深きことである。卽ちこの兩者の對立抗爭が止まないと云ふことは兩者が共に片面的なるが故であるがまた兩者がかく對立

的な大いなる勢力となつて居ることは共に片面的な眞理を有して居るからである。かくて現代の生の哲學としての經濟哲學は、哲學的精神を以てこの相對立するところの兩者に對し、兩者の對立を媒介することによつて、より具體的な思想體系に到達しなければならないのである。この點に於て今日の我國も亦古代ギリシヤの市民社會の沒落期に於けると同樣な哲學的段階に立つて居ると云ふことが出來るのである。かくて社會主義的立場と國家主義的立場との對立に直面せる今日の我々も、正にこの對立を媒介してより具體的な今日の國民主義的立場の確立を求めなければならないのである。

而もこのことは單に哲學的な要請としてのみならず、現に現實界に於ける事實の發展的方向として見られ得るところのものである。

即ち既に述べたるが如く、ロシアに於ては、現代の市民社會をその個人主義的原理を徹底することにより自由なる個人の自由なる聯帶としての國家なき萬民社會へ萬國の勞働者の團結に依つて變革せんとするところのマルキシズムの立場の自覺に於て、變革が爲されたのであるが、而もかくの如くに人間生活の國民的單位と云ふ根抵深き歷史的事實を事實上無視すると云ふこは倒底不可能なるが故に、その變革の事實上の進行に於ては次第に國民的單位の事實が重んぜられることゝなり從つて理論上に於ても一國社會主義の可能が高調されるに至つた。かくて對外的關係についても、各國民に對し劃一的な理論を以て臨まんとせし普遍主義的立場より次第にその特殊性

を重んずる立場に向ひつゝあるのである。かくて出發點に於ける普遍主義的萬民主義的なマルクス的社會主義の立場は次第に國民主義的方向に轉換しつゝあると云ふことが出來るのである。これと反對に現代の獨逸に於ては國家の爲めに人民を手段とするところの國家主義的立場に於て變革が行はれつゝあるのであるが而も封建社會人とは異なつて市民社會を通じて自覺的となれる現代人にかくの如き態度を以て臨むことは、一國の國際的非常時の場合を除いては不可能なるが故に、結局國民的生命を重んずるところの國民主義の立場に轉換せざるを得ないのである。この國家主義の立場はこれを對外關係について見るも、同樣に一國の支配の爲めに他國民を手段視せんとする立場であつてそれは一見自國民にとつては便宜なるが如く見ゆるのであるが而もその結果他國民も同樣の立場に立つて我に對することゝなるが故に結局現代に於けるが如く各國は戰爭と戰爭準備の爲めに忙殺せれら今日まで發展し來れる人類の物資的生產力をも貴い精神力をも消耗し盡さなければ止まない結果となるのである。かくてそれは「中外に施して悖らざる」眞の具體的な立場ではなく結局現代の個人主義的原理を國民單位にまで擴大したものであり利己主義的主體が强大となるだけ事態を惡化するところのものである。

かくの如く理論的に見るも事實的に見るも人類發展の現段階に於て唯一可能なる具體的本質的なる立場は、眞に國民的生命を重んずるところの立場、從つて內に向つて國民的生命を重んずるのみならずまた外に向つて他の國民的生命を重んずるところの眞の國民主義の立場のみである。

かくの如く人類發展の現段階について一般的に考へたところのものを更に、我國の生に卽して

考へるならば、一層明確となるのである。即ち「生の哲學」は生の本質に即し生に對して實踐せんとする立場である。故に現代の發展段階に於ける生の本質に即しなければならないと共にまた生の空間的本質に即しなければならない。即ち各國民の生命はその發展的段階を等しくすることにより相似た點を有するが而もその發展的段階を貫いた各々の個性を有して居ること、個人の生命に於て見られると同樣である。かくて一國民の變革的自覺はその國民的生命の發展段階に即しなければならないと共にまたその國民的個性に即しなければならないのである。この點より見るならば今日我國に於ける變革的思想が嘗つての社會主義的立場より國家主義的立場に向ひつゝあると云ふことは、ユダヤ的立場をすてゝ獨逸的立場に向ひつゝあるにすぎないのであつて、それは未だ眞に日本的な立場の自覺ではないのである。即ち今日の社會主義の哲學基礎を置いたのはユダヤ人マルクスであつて前述せし如くヘーゲルの國家主義哲學を「逆立ち」せしめその市民社會的原理を本質的なるものとなしこれをユダヤ的に徹底せしめることによつて社會主義の哲學的基礎を置いたのである。この哲學的基礎の上に打立てられたる經濟理論もユダヤ人リカルドオが英國の個人主義を鋭く理論化したところのものを繼承し更にこれをユダヤ的に徹底したところのものである。かく今日の社會主義的基礎がユダヤ人によつて置かれたと云ふことは、國家なき民族として而もまた鋭き數物的推理に長じたるユダヤ人の性格の反映がその體系に於て見られる所以である。今日の社會主義的運動がユダヤ人によつて多く媒介されたことも自然である。これに對して今日の國家主義立場の基礎を爲すヘーゲル哲學は獨逸の生んだ最も偉大な哲學體系であると共

にまた國家主義的な獨逸國民精神の現代に於ける最も代表的な哲學的表現である。故にまた今日の獨逸の國家主義的變革運動を最も深く哲學的に基礎付け得べきところのものである。かくてまた今日の國家主義運動は獨逸に於て最も力强く押し進められ、これと共に我國の國家主義的運動も力附けられたのである。

かくて我國に於て今日まで變革思想として支配的であつた社會思想はユダヤ的なるものであり國家主義的思想は獨逸的なものであつて、未だ眞に日本的なものは確定されていない。眞に日本の國民性に卽した本來的な立場は國民主義のみであるが、このことは先づ我國史上の變革期について明にされる。卽ち國史上に於て最初に見られる自覺的な社會變革は大化の改新であるがこの變革を指導せし思想は、唐の國家主義的思想を國民主義化することによつて國民的生命を重んじたところのものであつた。[1] 更にまた中世の封建制度の現代の資本主義的制度への變革を指導せし思想は一層明確に國民主義的なものであつた。卽ちこの變革の自覺の結晶とも云はるべき『五ヶ條の御誓文』とその『御宸翰』に於ては、この「我國未曾有の變革」の究極目的が「天下億兆一人も其處を得ざれば朕が罪なれば」としてまた「萬民保全の道を立てんとす」として示めされて國民的生命が眞に重んぜられて居る。この究極目的の爲めに「武家權を專らにし表には朝廷を推尊して實は敬して是を遠け億兆の父母として絕へて赤子の情を知ること能はざる樣計り成し」た社會を「君臣相親しみ上下相愛し恩澤天下に洽」きところの眞に國民的生命を重んずるところの國民主義社會又は國民共同體へと變革すべきことが示めされ更にこれを實現すべき根本方策が五ヶ條に於て

1) 内田銀藏『日本經濟史の研究』第一一五頁以下參照、牧健二『日本法制史概論』第五七頁以下參照

明示されて居るのである。かくの如く我國史上に於ける自覺的な變革は、明に國民的生命を重んずるところの國民主義的立場に於てなされたのである。故にこの國民主義の立場こそが日本的な立場であつて、今日の市民社會の變革問題についてはこの國民主義の立場が哲學的な自覺に確立されねばならないのである。

かくて國民主義の立場こそが、現代の生の發展段階並に我國民性に卽する最も具體的な立場であつて、今日の經濟哲學はこの立場に於て確立されなければならないのである。

以上に於て「現代の生の哲學としての經濟哲學」の課題とこれを解決すべき立場を一應明にしたが故に、進んでこの立場の上にその體系を確立しなければならないのであるが、國民主義の立場の具體性はこのことにより始めて十分に明になるのである。また既に述べしが如く[1]、今日の經濟學は市民社會の變革體系として確立されなければならないのであるが、經濟學はそれ自身としては科學として哲學と異り實在の一部を對象として居り且つこれを全實在との聯關に於て根本的に反省するものにあらざるが故に、それが現代の變革體系として確立し得るが爲めには、必ずかくの如き經濟哲學に基礎付けられなければならないことも一層明にされるのである。而して現代の市民社會制度の個人主義的經濟哲學が英國人によつて、市民社會制度變革の社會主義的經濟哲學がユダヤ人によつて、その國家主義的經濟哲學が獨逸人によつて確立されしが如く、この市民社會制度の國民主義的變革哲學とこれに基礎付けられたる今日の經濟學こそが今日の日本人によつて確立されなければならないところのものである。

1) 本誌前號拙稿參照